令和4年度倉敷未来プロジェクト「北前船アート・プロジェクト」　倉敷市立短期大学

＜しもつい子ども工作ワークショップ＞

しもつい地域における学びと創造の形として、保育実践現場や学校、公民館や美術館など地域で実践されているワークショップという手法に着目した。

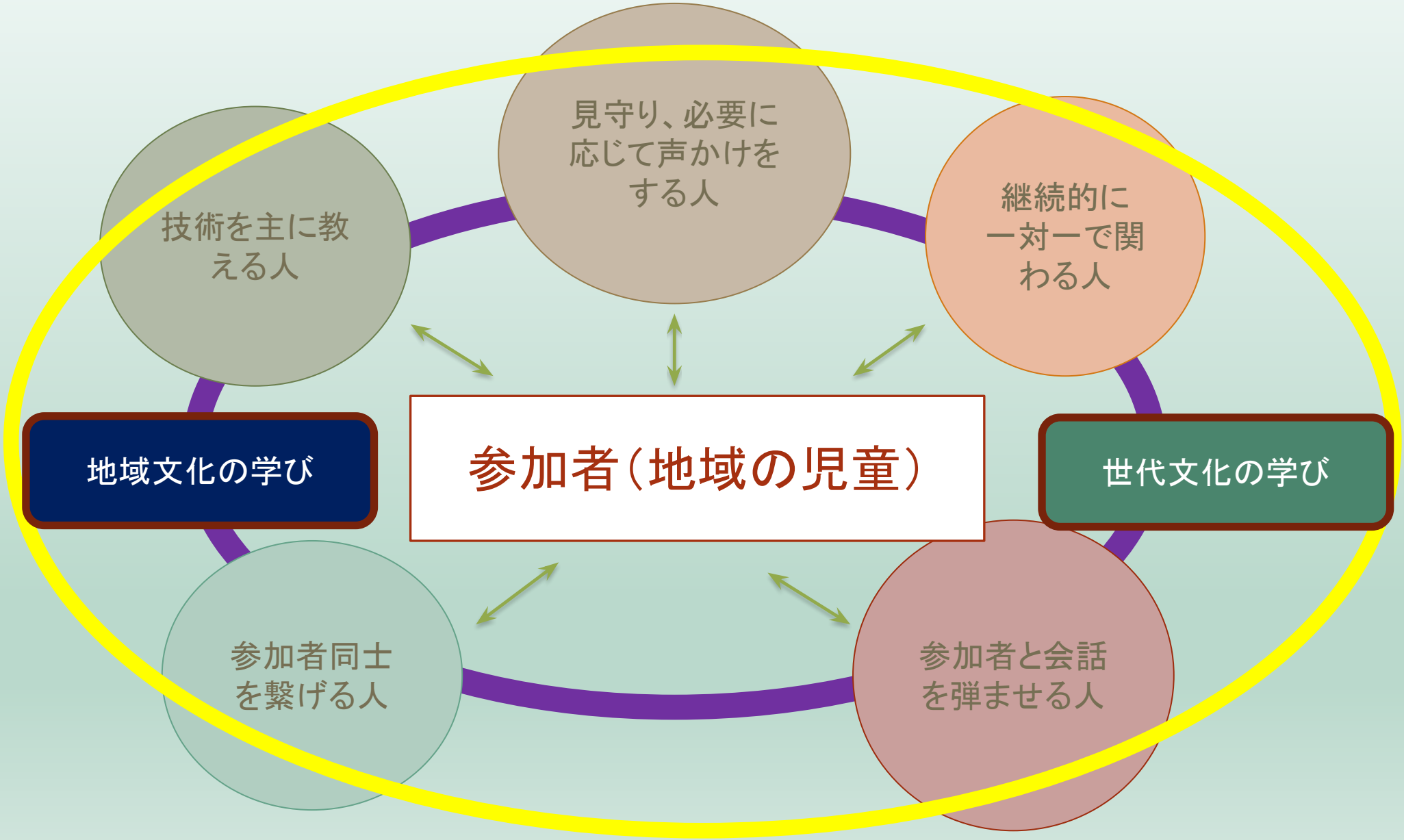
＜造形ワークショップの目的＞

下津井地域の児童が、気軽に参加し、工作等を体験する自発的な場を設定した。

私たち服飾美術学科・保育学科学生は、児童の気持ちに寄り添いながら、交流活動を支える存在になることをねらいとした。また活動に加わったり、見守ったりする中で、子どもの造形行為が「主体的なもの」になるような直接的・間接的アプローチを用い、作品完成まで導いていきたいと考えた。

制作過程を重要視 → 「ものづくり」＋「しもついにおけることづくり」

＜しもつい子ども工作ワークショップでの支援者の関わり方のスタイル＞



〈しもつい子ども工作ワークショップについて〉

【活動主題】「児童クラブにおける北前船のシールアート」

（1）活動のねらい
　児童の発想や気づきを大切にし、認めたり共感したりする。
　児童と関わることで、地域の育みや、（こども目線における）
　独自の世代文化を知る。
（2）WS実施日・・令和4年8月1・8・9日、10月22日
（3）開催場所・・・A児童クラブ（会館）
（4）活動内容・・・北前船シールアート、工作・絵画
（5）参加者人数・・・各10時～15時　学生9名、児童40名（20名×2回に分けて）

＜しもつい子ども工作ワークショップ活動の様子＞

小学生1～4年生頃の児童は図式期とよばれる描画発達ステージにあり、自ら描いた形態を基にそれ以降の構図を自分なりに再構築して楽しむ傾向がある。
また、対象を描きながらの呟きもみられ、下津井の話を展開しつつ、他者との交流で新しいイメージが触発され、描画が進んでいくことがある。指導者は、子どもの物語的な文脈を捉え、その内容が画面に反映されるように支援すべきである。本研究においても独自のメソッドを確立すべく、活動を実践した。

〈児童クラブにおけるシールアートWS〉

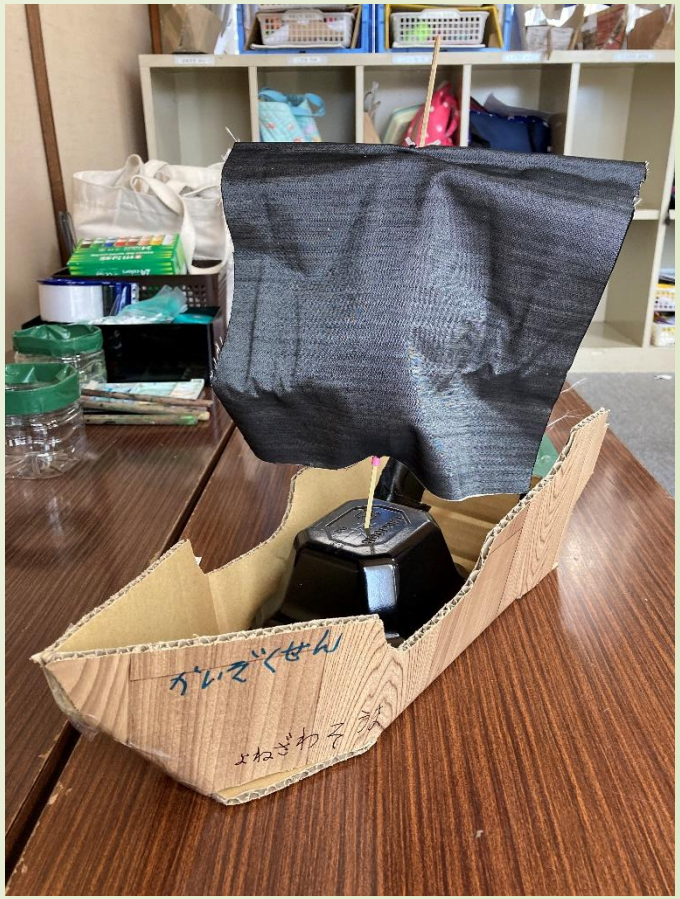
写真のように、私たちは児童クラブにおいて絵画・工作活動を実践し、学生によるファシリテーターとしての気づきを得ることができた。子どもがもつ独自の描画物語に沿い、その文脈の中で支援することが肝要である。しかしながら固着された関係（作品が完成に近づくだけ）では、子どもの造形イメージへの興味は離れていくことから、一方で、製作途中における新たな技法（貼り方や色の工夫）の提案も試みた。

<学生支援者として>
・初対面ではあるが、すぐに仲良くなれた。好きなものや事を共有して楽しめた。
・児童の気持ちが高揚したタイミングで会話を盛り上げることでコミュニケーションがより図られた。
・児童ができるまで待つ関わりの重要性を感じた。
・児童からの発話（方言）を通して地域の良さ、やさしさを感じることができた。

<環境>
・異年齢が自然に関われる家庭的な空間と、指導者の目が届く環境の大切さが理解できた。

<その他>
・指導員、保育士の方は活動中、児童の行動をよく見ておられ、個人に合わせた教え方で支援されていて良い教師モデルとなった。

＜児童＞
・学生との会話の中で、児童なりに一つ一つ丁寧な返答をして関係性を作っていた。
・平時においては、多動であり協同活動をすることが難しい児童が、シールを貼る作業を丁寧にすることができていた。作業に集中して取り組むことができていた。
・児童から、しもつい地域における日常生活の様子を聞くことで、地域独自の文化や生活観を感じることができた。こども目線からみる大人との距離間や、友人との密接な関係性をうかがい知ることができた。



しもついアートの制作過程では支持体を作る木工加工から始め、完成したパネルに下書きをするまでは容易に作業を進めていくことができた。しかし、シールを貼っていく段階へと進むと画面に色を載せることが進まず、根気のいる作業だと感じることも多かった。一方で、穏やかな雰囲気の中で、児童との会話をしながらの共同作業は、チーム〈しもつい子ども工作ワークショップ〉としての一体感を感じ、完成の達成感もより深くなった。

今後も継続して、倉敷未来プロジェクトでの学びを生かし、地域研究の理論と活動実践を往還させながら、地域文化や児童との交流活動における支援を継続したい。